# ごまめの歯ぎしり

阪　口　　豊（地理学教室）

古来，学問の母といわれる地理学を教育・研究する小さな教室で，人生のほぼ半ばを過すことができたことは幸せであった。多岐にわたる地理学の教育を少数のスタッフでカバーするために，自分の専攻以外の分野の授業も持たねばならなかった。幸いそのための準備は私にとってむしろ楽しいものだった。この義務がどれほど私の研究に役立ったか計り知れない。皮肉なことだが２講座の小教室であることに先ず感謝しなければなるまい。私の本当の先生は謦咳に接した恩師ではなく地理学教室であるのかも知れない。

次に，仕事の面で大学院の諸君に感謝したい。学生諸君とのお付き合いがどれほど私の視野を広げ深めてくれたことか。院生の多彩な研究を少数のスタッフで指導するのは容易なことではない。私が学生時代に陸水に興味を持ったばかりに，ゴカイの分類から湖の生態系の研究に進んだ学生を指導するはめになった。学生の研究内容を理解し適切なアドバイスを与えるために私も勉強しなければならない。しかし，さすがに私ことごまめはゴカイの分類まで勉強する気にはなれなかった。体長精々５㎝程度のごまめでは30㎝にも及ぶものがあるというゴカイ様には歯がたたない。ある時，お魚の生物地理学的研究がしたいと相談に来た学生がいた。うっかりするとこちらが食われてしまいそうに思われ，まことにお気の毒だったが，ごまめの力及ばざるところといってお断わりした。あの学生は今どうしているだろうか。先端化・細分化する大学組織の中で行き場に迷った学生が受け入れられるようなおおらかな学科が東京大学にもっとあってもよいと思うのだが。

次に，異国の土地で野外調査の楽しさを満喫する機会を与えて下さった隣接分野の同僚の方々に感謝したい。ごまめといえども，砂漠の夜の人工衛星の飛びかう天空の美しさに見とれながら森羅万象の不可思議に思いをはせることもある。ごまめはごまめなりの仕事ができたことを幸せに思う。

昨今の世の中は世智辛くなり，速効性の見込みのある分野には金を出すが，いつどのように役立つかも分らない分野には金が廻ってこない風潮がある。ン十万円の機器を何程か購入でき，フィールドに設置できれば，確実に良い成果が得られることが分っていても，ン億円の機器よりも購入しにくいというのはおかしな話ではあるまいか。

地球環境の変化が問題になっている。自然環境の保護に欠かすことのできないのは，自然環境の正しい姿の認識とその変化の実態を総合的に把握することであろう。そのための教育・研究組織を

完備すべきである。そして，その一端はフィールドから学ぶことの大切さを体得し，フィールドワークを心から楽しいと思っている自然史的研究を目ざす研究者・学生によって担われるべきである。東京大学の将来計画にこの点が充分に配慮されているだろうか。

近頃，〝学科のスクラップ・アンド・ビルド〟なる言葉が聞かれるようになった。年を取ってすっかり寒むがりになったごまめにとって一入つらい気持にさせられる一言である。

ごまめは田畑の肥料になったり，豊作や健康を意とするめでたい食品であるそうだが，はたしてわが教室発展のための肥しになれたかどうか，甚だ恆怩たるものがある。